

金屏や蝶睦しの影久し
菜の花に金色の蝶舞はせばや

奉祝大正天皇御成婚

相連れて蝶や雲井に舞上る

(白人會二十五年)銀字結

辻占に置く銀簪や春の宵

曉や銀地褌せたる春の星

花蔭や伊達の小太刀の銀作り

某畫伯古稀

青緑や七千尺の山笑ふ

某夫人還曆

鶯や又双六のふり初め

某氏喜壽

龜鳴くや此君に壽を獻ずべく

喜の溢るゝ庭や松の花

某氏初老祝吟

これからが男盛りや梅の花

某氏古稀

古桃や稀に見るてふ花の數

某海軍將校出征を送る

春

往けや君時如月の眞帆の風
某氏外遊送別

大洋や君が船出を水ぬるむ

報知機の雄圖を送る

北門や一機歸雁を追うて出づ

岡野酒枝氏の外遊を送りて

行く雁や家鳴は門に伸び上る

竹冷君の外遊を送る

その舟をやらじと伸びし柳哉
桃櫻ちるなせめてはお立まで

下萌や君ゆく道のあざやかに

九疊君の歸朝を迎ふ

春の日も短き土産咄かな

暖う逢ふやあれから八ヶ月

その朝芽ぐむお庭の牡丹哉

英國皇儲歡迎

舞ひ出で蝶も迎へむおん車

某碁客初段に上れるに

咲きすゝむ梅や碁石の白々と

醉夢庵句集天覽に入りしに

御簾もるゝ灯に鳴きすゝむ蛙哉

享樂體

醉を吹く赤行燈やおぼろ月
目にあかぬ物いふ花に宴かな
流連や柳の茶屋の迎ひ酒
菜の花や今日も紀文が小判撒き

武道體

鐵扇や氣合に落つる蜂一つ

昭憲皇太后を悼み奉る

尊しや雲輝いてゆく春の
此の朝を聲なく雁のまかりけり
逝く雁や雲に御車軋るかたと

諒闇

鐘の外鳴るものもなし花の山
小葉君を悼む

春寒う主なく据ゑし机かな
望東君三回忌

東に星の見えしを春の闇
義姪銚次郎を悼む

春

春の雪さりとは竹の折れんとは
竹冷翁を悼む

春雨や此の窓に袖搾れとは
春雷や耳掩ふ間を竹折れし
まだ見せる花もありしをゆく雁の
跡もやと逕たどるや竹の秋

米山尋九君の令息を悼む

香炷けば石や動かん春の雨
へし折つて梢につらし梅の風

湖山追悼 二月十七日於樂天居席題故人の院號(剛文院)

に因み、春雜剛文の字結

初雷や稚きものゝ剛くして
その文の如ゴトなめらかに春の川
烏黒翁を悼む

墨梅に香を覓むるや徒らに
鳴雪翁を悼む

雪崩れ散る其の花浴びん梅が下
香雨君悼む

雨寒う落花の庭に香りけり
春

夏

還曆(自)

腰のしていざや交らむ辻ヶ花

樂俳三十年(自)

此先の七里も樂し夏霞

三里來て煙草の甘き新樹哉

とかくして三十年や栗の花

長女生産(自)

撫子の今度は赤う咲きにけり

角田不二男君の結婚を祝す

青 簾 青 疊 この御館の

某氏新婚

お二人やこの浦船の夕涼

初めて男子を得たる人に

ふりかへる君が門邊や初幟

同じく

封とけば颯と聲ある扇かな

初蟬の凜たる松の梢かな

又畔博士母堂喜壽

夏

繪日傘や末廣かりとさしかけん
夏柳千筋千代ふる緑かな
實櫻や幹はいよく太くして

奠都五十年祭

謳へばぞ舞へばぞ市の明易き

夢豪君の新築を祝す

雨の香や木の香や縁の夕涼し

某村長退職を聞いて

まっはりの藻草捨つれば水涼し

紫草君の男子を得たるに(麗二の名に因む)

金麗水に生れて風の薫じけり

其角堂襲名祝

晒井や綱もちかはる男振り

四三子女史外遊を送る

順風にその花束の薫りかな

九曇君外遊を送る

持ちかへて握手を交はす團扇哉

かげ膳にそへて團扇も供へけり

日本の風忘るなと團扇かな

折句ミヨコ(爲長女)

夏

明 笛 や 宵 を 涼 し と 居 士 が 家
店 塞 ぐ 夜 店 に 暑 き 小 路 哉
水 番 の 宵 の 篝 や 小 糠 雨

禪字結

野 狐 禪 の 尻 尾 出 した る 浴 衣 哉

時字結

高 時 を な ぶ る 天 狗 や 涼 み 臺

靈山墓參(自)

椎 落 葉 掃 へ ば 苔 の 花 香 る

南岳忌

南 風 や 君 が 筆 意 を 竹 に 見 る

竹涼君を悼む

う と ま し き 壁 の に じ み や 五 月 雨

時 鳥 耳 を 疑 ふ 眞 晝 か な

可成君を悼む

梅 雨 な ま じ 晴 れ て わ り な き 袂 哉

夏 雲 の 崩 れ 了 ん ぬ 蓮 の 風

醉香君を悼む

雲 の 峯 あ つ た ら 人 を 阻 て け り

ま さ く と 夢 に 語 れ ば ほ と ゝ ぎ す

夏

雨蛙雨は呼んでも来ぬ人よ
あゝ螢骨になつては聲もなき
卯の花に白玉樓も迷ひ出よ

悼吐雲博士

夏の山わが吐く雲にかくれけり
對し座す山にも語なし午睡起き

冲舟君の弟を悼む

また濕らす袂わりなし更衣

水哉君の初孫を悼む

母衣蚊帳に辿らん小さき夢の跡

そのあとやせめて金魚を放ちやる

悼友石翁

青簾似た咳も洩れよかし

悼不曲君

涼み臺昨日は君のゐませしに

悼寧齊君

わりなしや君が行方の木下闇

某氏の若き妻を悼む

青梅のはたと落ちたる夕淋し

山本九藝君の長子を悼む

若竹や此の蝕のあらんとは

山本九臺君の嚴君を悼む

青簾其の咳も洩れずなんぬ

悼家父(自)

墨香る昨日の床を蓮の花

秋

還曆(自)

葛紅葉巖も若やく日なりけり

尾崎紅葉君の遺子夏彦君菊地幽芳君の息女と結婚す

菊紅葉日本晴の二人哉

鷹野氏金婚式

金色の月を宿すや松二木

竹冷翁還曆七夕の會

星合や地に相生の松茂み

秋

遠藤氏祖母米壽

此 姫 に い で あ や か ら ん 菊 の 酒

河合明石丈初舞臺

初 鷹 の 羽 音 に 仰 ぐ 人 數 哉

男 郎 花 此 の 子 の 丈 を 咲 き 競 ふ

田之助丈の外遊を送る

秋 高 く 舞 ひ し 千 鳥 の 羽 音 哉

錦 す る 君 が ゆ く 手 の 花 野 哉

虚心子君の外遊を送る

さ り と て は つ い と 乙 鳥 の ゆ く 事 や

長男撫象の外遊に餞す

や が て 來 ん 雁 に 便 の 待 た れ け り

渡米留別(自)

海 遠 し 歸 る 乙 鳥 を 道 づ れ に

赤 蜻 蛉 ち よ い と 隣 の 洲 に 遊 ぶ

某氏文臺開

此 の 庵 の 菊 香 る 窓 開 き け り

念三君歸朝歡迎

金 風 や 舟 を 下 り 立 つ 男 ぶ り

童心句

秋

體操の様
に初雁渡りけり

先人尺牘卷に題す

花もやと梅に立よる小春哉

大震火災(大正十二年)

暑すぎる秋や地神の憤り

我門に自警の人の夜長哉

戴くや玄きがまゝを今年米

眞黒に焦げし銀杏や渡鳥

復興の秋を香るや菊の花

悼不曲君

文月を文やる術もなき友や

悼鷺塘君令息

稲妻に花火は長き命かな

無黄君の夫人を悼む

稲妻にせめて鏡をかざさばや

蘇峰翁の令息を悼む

掌を落ちた玉の行方や天の川

梧一葉幹の青きに反きけり

夢堂君を悼む

いたづらに石の青さよ草の露

秋

酒竹君悼む

秋の野や呼べど答へぬ人のあと

悼春汀畫伯

秋の川筆洗ふべき人去りて

蝶追へば泡と消えたり秋の川

白人會主催、醉香、竹冷、吐雲、南亭、鼠禪合祀祭

今日迎ふ魂や五人の目白押

悼犀水博士殿君

白菊の玉とや露の碎けたる

冬

還曆(自)

嘉邊里花人の温みに咲いてけり

御慶事

早梅の壽を獻す白に紅に

立太子祝

初冬を生く日足る日の温さ哉

年の暮四男を得て(自)

行く年や我に四郎の置土産

冬

逆さ蓑和子が前途をとせんと

某氏文臺開

机置く窓新らしや小六月

三田村黄雲君銀婚式

睦ましう冬をこもるや銀襖

某氏新婚

冬籠温さうな二人かな

留別(自)

しぐるゝやふりむく顔に一雫

震災の跡を過ぎて

塔一つ未だ碎けず暮早き

假橋の徒歩連絡を初時雨

夜を霜のバラツクの屋根光りけり

焼跡の安食堂や冬の蠅

震災復興體

小春とて起き上りたる達摩哉

悼湖山君

解落ちし音の胸打つ氷柱哉

悼春浪君

冬の浪巨岩を呑んでしまひけり

冬

昭和七年十月二日印刷
昭和七年十月七日發行

版權
所有

著者 巖谷小波

東京市芝區高輪南町五十三番地

發行者 巖谷季雄

東京市本鄉區金助町二十九番地

印刷者 杉真一

東京市本鄉區金助町二十九番地

印刷所 日興舍印刷所

發行所

東京市芝區高輪南町五十三番地
千 里 閣
振替東京六二一七六番

Vertical text on the left edge of the page, possibly bleed-through from the reverse side.

Faint, illegible text and a small rectangular box on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

633
161



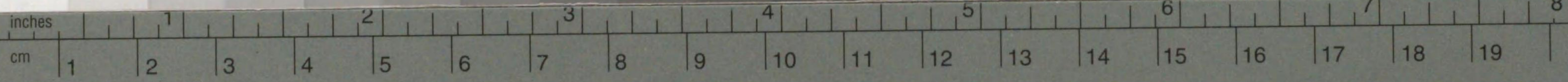
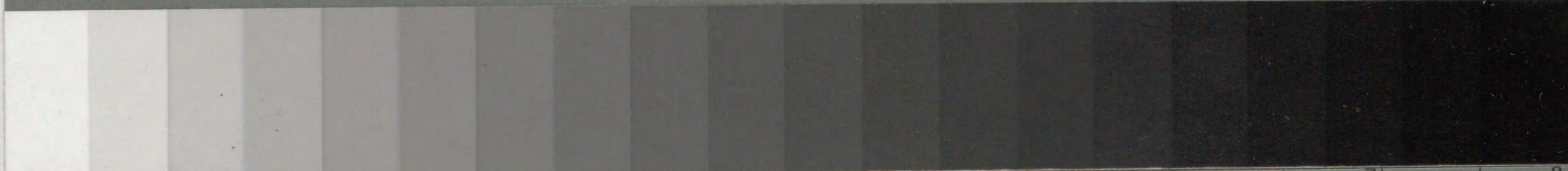
平里閣

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

